

# 長門峡と錦帯橋

研究第二部 主事 島田 久美子  
研究第一部 主事 伊藤 尚美

晩秋、山口県の日本海側にある阿武川・長門峡を訪ねました。

石英斑岩が浸食を受けて生じた深く険しい渓谷の長門峡。ハイキングコース6.4kmを、水音を聞き、空気を味わい、普段あまりお目にかかることのない険しく壮大な岩山を見ながら、約2時間渓谷美を楽しみました。

落葉樹が少ないのか、紅葉はあまり目立たなかったけれど、それでも赤や黄に色づいたもみじがはらはらと舞い、歩道にもみじの柄模様を作っていたのが、なんとも可愛らしい雰囲気でした。

歩道の脇に木々が沢山生い茂っていて「溪流が見えない」



長門峡

と、思ったりもしましたが、観光客が見やすいように木を伐採したら、当然今の自然は保てなくなるだろう。渓谷という自然の中に、侵入していながら文句を言うなんて「わがまま過ぎるかな」と、自分勝手な思いを反省しました。

次に、瀬戸内海側では錦川・錦帯橋へ。

この日をとても楽しみにしていました。数年前テレビのCMで錦帯橋の姿に一目惚れしたからです。

映像でない“本物”に会いに行く。大きな期待と「大した事なかったりして…」なんて少し不安もありましたが、そんなものはすぐに吹き飛びました。

真っ青な空、背後に連なる緑の山々、延々と続く美竹林、そして清流とともに、秀麗な姿が私たちを歓迎してくれて

いるようでした。

第一印象は、「華がある」という感じ。暗いトンネルを抜けた瞬間のように、パッと明るく、まぶしく見えました。

橋を近くで見て興味を引いたのは、橋脚や橋桁の精密で美しい組木技術（写真1）。

この美しい形状、巧みな構造をもつ錦帯橋も現在で三代



(写真1)

目。初代の橋は延宝元年（1673年）創建。そして延宝2年に再建し、276年間その雄姿を誇っていましたが、昭和25年流失。しかし、昭和28年に長さ210m(橋面に沿って)、直線で193m、幅5m、橋台の高さ6.6mの名橋は再びよみがえりました。

橋を下から見上げれば、300数年前、高度な組木技法を最大限に活かした精巧な構造がはっきりと見えました。「上からの圧力でより一層頑丈になる仕組み」という。聞けば聞くほど感心してしまう。

近年、ライトアップや彩色などで修景する橋が多い中、この時代の美をそなえた技術の高さには驚かされ、大きな拍手を送り続けたい気持ちで胸が一杯になりました。

橋の下を流れる錦川は、かつて、橋を2度も流失させたとは信じられないほど、穏やかで静かな清流。

橋周辺も、十分水はきれいでしたが、“上流はもっときれい”という。じっとしていられず、すぐに見に行きました。

淵は、サファイヤのように青く、深く澄んでいました。今、錦帯橋付近で河川改修工事が始まっていました。

親水護岸や、船着き場を造るようだが、人工的に華美でなく、不自然でなく、この景観に馴染み、錦帯橋・錦川の名脇役に徹してくれるようなものを…。と思いながら岩国を後にしました。



錦川上流